



旧書上商店 ゆかりの建物群

所在地 桐生市本町2丁目界限
花のにしはら（増子相一代表）

書上商店は、明治30年代以降、両毛地域最大の織物買継商として桐生産地で繁栄を極めた。当主は代々、書上文左衛門を名乗り、特に十一代文左衛門の才覚は抜き出ていたと言われる。内地織物、輸出織物の両部門を手がけ、内地では両毛地方の各都市に出張所を設け、東京・大阪・京都・名古屋など全国に顧客を広げた。輸出では欧米向けの羽二重、中国向けのタンタンピース（綿絹交織）を積極的に展開した。

学卒者の登用、店則の構築、横浜、上海への出張所開設による市場動向の把握、「書上タイムス」という情報誌の発行による産地（両毛地域）PRなど、革新的な経営が発展を促した。

十二代文左衛門は市議会、県議会議員としても活躍、晩年は母屋を坂口安吾に提供したことでも知られる。明治22年に発行された銅版画には、店舗や蔵、居宅が連なり、その全貌から繁栄ぶりが見てとれる。

戦後、書上商店の倒産後は、ゆかりの建物群は多くの人たちが所有するに至り、荒廃が進む建物もあるが、本店の建築物は「花のにしはら」として営業されている。所有者増子相一氏の尽力により平成18年には店舗を覆う大看板を外し、創建当時の姿に改修した。豪商の面影を伝える景観を継承、本町一、二丁目の街並みに厚みを加えている。

